

は、いずれもフランス学派の伝統的手法を駆使したもの。さらにベルギーの Christians「ベルギーのワロン地方における孤立農圃」A. Verhulst「中世フランドルにおける農村景観」があり、デンマークの S. Gissel「一七〇〇年以前のゼーランドの三圃農業」は、一三世紀にこの農法の痕跡が分散的にみられるが、その普及は一六世紀をまたねばならないことを実証し、スウェーデンの G. Enequist「一七〇〇年頃のスウェーデン集落」は、一〇戸以上の集落はこの地方では大集落で、南部の旧デンマーク領に多いこと、北欧独特の「太陽分割制」と大集落との関連についても蓋然性があることについて述べている。

ポーランドの M. Kietczewska Zaleska「オメツフツ地方における農村集落形態」では、一六世紀王領地の規則正しい平行状の三圃農地や、より古い二圃農地の存在が注目をひく。

主権国ドイツでは、H. Grees「集落の荒廃過程」W. Lutz「チロールにおける農業集落」W. D. Sick「ヴェルテムベルクのロイパー山地における集落発達の比較研究」W. Sperting「スロヴァキアにおける集落

形態」など、いずれも手堅い形態発生学の手法が駆使されている。W. Haarnagel「北海海岸地方の先史集落形態」は発掘成果にもとづいて、住居形式・盛土の成立・紀元前五―六世紀の散村や小村をはじめとする集落形態の変化・経済生活の推移などを推定したもの。W. Hüttenroth「近東における紐状ブロック農地と開拓」と H. Zitz「北インドにおける農村集落」は、ヨーロッパ集落研究の観点をアジアにひろげたもので、農地形態と古オスマン法、灌漑施設、開拓などの関連がとくに注目される。研究対象や方法には国ごとのちがいがあ

るが、相互の討議を重ねて、全ヨーロッパの集落、農地を共通した発展系列の上に位置づけようとする努力の跡が感ぜられる。最後に付けられた H. Uhlig と C. Lienau の「農業景観の術語に関する調査討議の報告」にも、こうした配慮が明白であり、とくに後者は、ブロック農地・ゲヴァン（耕区）・アルメンデ（入会地）などに精密な細分類をこころみ、概念の統一を企てている。

（水津一朗）

青銅遺物図録

——八・一五後蒐集——

朝鮮半島における初期金属文化の研究は、関係資料の大幅な増加もあって、第二次世界大戦以後、とくに最近の十年間に、めざましい発展とげた。このことは、南北に共通する。ここに紹介する『青銅遺物図録』には、韓国の国立博物館が一九四五年八月十五日以降に蒐集した青銅製造物のうち、初期金属文化に関する主要なものを選んで収めてある。同館の『学術資料集』第一冊として一九六八年末に発刊された。

写真図版三十三枚。実測図図版二十二枚、巻末の解説十九頁のこの図録には、出土地点ごとに同時に見出された遺物を網羅して収めたこと、写真だけでなく実測図多数を入れたこと、解説文のなかに出土遺跡に関する詳しい記述があることなど編者の工夫のあとが認められる。言うまでもなく、考古学者にとってありがたいのは、出土地点と出土状態が明確な一括遺物群である。したがって、そのような一括遺物群十一件が、本図録の大半を占めるのは当然である。それらのなかにあって、特に、これからの学

界の問題になりそうな出土例を、次に紹介しておく。

まず挙ぐべきは、忠清南道大田市槐亭洞出土の遺物群である。銅劍一本、多鈕鏡二面、小銅鐸二口、防牌形銅器一個、円蓋形銅器一個、劍把形銅器三個、磨製石鏃三本、天河石製飾玉二個、無文土器壺一個、黒陶長頸壺一個（名称は原文のまま）の各種の遺物が地下につくられた長方形プランの一石室内から出た。防牌形銅器というのは、長楕円を半截した形の銅板で、周縁と中央に幾何学的文様帯があり、基辺に四孔を並べる。劍把形銅器とあるのは、節をもつ割竹形で、鏝をつけ、表面に幾何学的文様をめぐらす。ともに新出の銅器であるが、既知の初期青銅器と共通の趣向を否定できない。これらが、細形銅劍と共存し、黒陶系の土器を伴うという事実は、注目しなければならない。

また慶尚北道大邱市晩村洞出土の一括遺物は、三本の細形銅劍、それらの附属品と見られる劍把金具、鐔金具、鞘金具、のほかに一本の広鋒銅戈を伴う。広鋒銅戈は、その形状や、樋の部分と内に鑄出された文様から日本製のものであることに疑いなし。

く、重要な資料となろう。

銅鏃を伴った磨製石劍・磨製石鏃の一括遺物が、慶尚南道金海郡長有面茂溪里から出ている。最初はこのらが、支石墓からの出土例として報告されたのを、国立博物館員が再調査して、遺跡は地下石室であったことを確かめ、本図録に実測図を示して実情を明らかにした。

以上のほか、京畿道の龍仁から重なったまま発見されたという三枚の銅劍鏃の如きを含めて、朝鮮における初期金屬文化の貴重な資料が、多数、この図録に収められていて、第二次大戦後における関係資料の増加が、南鮮に限っても目ざましいことがわかる。

(A4版七四頁 韓国ソウル特別市国立博物館刊)

(有光教二)

京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告書（考古学関係）

京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊は、一九五九年から一九六七年に至るまで総じて七回この三カ国に

赴き、考古班・地理班・歴史言語班・人類技術班の四班にわかれて各々の分野で活躍してきた。そのうち考古班は七回とも組織され、とくに仏教時代の遺跡の調査に主眼をおいた。パキスタンでは、カシュミル・スマスト洞窟寺院跡の調査、チャナカ・デリー建造物跡の発掘、メハサンダおよびトリ山上寺院跡の発掘など、アシェカ碑文でその名を知られたガンダーラのシャーバーズ・ガリ村を中心とした地域を調査地域とした。またアフガニスタンでは、ヒンドゥクタシュ山脈以北において、ハイバクの石窟寺院跡の調査にはじまり、クンドゥズのバラ・ヒサルやドゥルマン・テペ、チャカラク・テペを発掘した。ヒンドゥ・クシュ以南では、ジェラバードないしその近郊において、フィル・ハナ石窟寺院、バサーワル石窟寺院などの測量を主とする調査およびストゥーパの分布調査を行い、ハッダの西南ラルマ村の仏教寺院を発掘した。次に掲げるものはこれらの調査の一部の報告である。

一、『ハイバクとカシュミル・スマスト——アフガニスタンとパキスタンにおける石窟寺院の調査一九六〇』水野清一編 京